

奇跡のコンタクト  
ストーリー●あなたは  
どこまで信じられるか

# UFOに乗って 宇宙を見てきた男

文／菊池溪

## ハワード・メンジャー驚異の体験

UFO目撃の報告例、宇宙人とのコンタクト報告例は年を追って増加している。アダムスキーのUFO同乗体験は、その中でももっとも古典的な例として知られているがここに紹介するハワード・メンジャーの驚異の体験は宇宙人の地球人に対する平和的なよびかけ、それに協力する地球人の存在だけでなく太陽系惑星間で行われる生命の生まれ変わりの秘密、月や金星に文明の存在することなども生き生きとした叙述をもって報告している点で、きわめて特異なものである。1956年に始まったメンジャーのコンタクト体験は、のちにラジオ・テレビを通して紹介され全米の人々に衝撃を与えた。これまでユーフォロジストによって論及されることの少なかったこの例はわれわれに何を語っているのか？

メンジャーと妻マール



別世界からやってきた美女の正体は？  
ハワード・メンジャーが初めて宇宙人とコンタクトしたのは、1932年、彼が10歳のときだった。

ニュージャージー州ハイブリッジで少年時代を過ごしていた彼は、もともとロマンチックな性格で、星を眺めては未知な世界について思いをめぐらすような少年だった。円盤型の物体が、空中にこつ然と現れたり消滅していく光景をそれまでにもしばしば目撃していた。

ふと彼の目は、自然の美しさよりも、もっとすばらしい存在をとらえた。いつのまにか、近くの岩の上にひとり女性の腰をおろしていたのだ。さんさんとふりそそぐ陽光が、肩に流れたブロンドの髪に美しく照り返している。年は25ぐらいだろうか、びつたりフィットした、ぬい目のない半透明の衣服を身につけている。そのあまりの美しさに、少年は息をのみ、その場に立ちすくんだ。金色の柔らかな瞳から、えもいわれぬ優しい愛のバルスのようなものがメンジャーの心に向かって伝わっ



てくるのが感じられた。  
「ハワード」突然彼女が名を呼んだ。「私はあなたに会うために長い道のりをやってきたのです」

幼少期を過ごしたハイブリッジ。ここで初めてコンタクトをもった。

彼女は、自分が別世界からやってきた人間であることを打ち明け、地球外の惑星に住む人間のいろいろな語ってくれた。また、メンジャーの将来について、彼は自分のコンタクトイとしての立場や価値をいざれ理解するようになるだろう、彼女の仲間たちと出会うことになるだろうと予言した。

この会話は15、20分くらいで終わり、少年は美女の微笑に見送られて家に帰った。その後、彼は何度も同じ場所に足を運んだが、再び彼女を見ることはなかった。

1941年高校を卒業したメンジャーは、翌年陸軍に入隊、カリフォルニアのキャンプ地へ送られた。ある日、キャンプ地の近くを歩いていると、カーキ色の軍服を着た見知らぬ男に呼びとめられた。メンジャーは、すぐに「宇宙人」だ、という直感がひらめいた。10歳のとき、故郷の森の中であの不思議な女性に出会ったときと同じパルスを全身に感じたからだ。

「そうだよ、ハワード、きみは小さいころ、われわれの仲間と会っているんだ、彼女とはいずれまた会えるさ」男はメンジャーの心中を見すかすようにそう言った。

男は、ハワイでまた自分の仲間とのコンタクトがあることを告げ

去っていった。そして、実際メンジャーはハワイで、美しい黒髪をした黒い眼の女性とコンタクトすることになった。

宇宙人との4度目のコンタクトは、沖繩で起こった。太平洋戦争のさなか、沖繩戦で重傷を負ったメンジャーは奇跡的に回復し、再びキャンプ地に戻る途中、背の高い軍服の宇宙人に話しかけられた。

男は、自分が金星人であること打ち明け、今後は、別の仲間たちとのコンタクトがつづくだらうと告げ、去っていった。

**美女、再び現れ  
協力を要請する**

1945年、戦争が終結し帰国したとき、メンジャーは24歳だった。この年の6月、驚くべきことが起こった。例の強い英念を受け、ひかれるように家の裏手の森にやってきたとき、突然西方から巨大な火球が接近してくるのに気づいた。降下してくるにつれ、ベル型をした金属性の本体と上部に丸く連なる乾窓が見えてきた。

ほう然とながめているうちに、着陸したその物体の底が開き、ハンサムな2人連れの男が現れた。さらに入口が大きく開き、フロンドの長い髪を肩までたらしめた美しい女性が後につづいて姿を現した。メンジャーの心臓は高鳴った。14年前のあの女性ではないか。

不思議なことに、彼女は当時とまったく変らぬ若々しい風情を保っていた。

「あなたは14年前に岩に腰かけていた人ですか？」

「ええ、そうですよ、ハワード」

「でも、年をとっていないわ、私はずいぶん50歳以上ですよ」

この再会は、感動のうちに短時間で終わったが、メンジャーは宇宙人によって地球上から選ばれたコンタクトイの1人で、今後も地球援助活動の手助けをしてもらうため多くの情報が彼にもたらされる、についてはテレバシーの訓練もしておくようにと言われた。

3人が船内に姿を消すと、宇宙船は閃光を発しながら西の空へ没していった。

この再会が転機となって、メンジャーは「生まれ変わった」。宇宙人による目に見えない援助のせいか、生業の看板業も繁盛し、多忙をさわめた。その間、実業家や不動産屋に身を変え生活している、金星人・火星・木星人・土星人たちが気軽にやってきて、談笑しながら情報を伝えてくれるのだった。

メンジャーが撮影した宇宙人と宇宙船。  
放射線のため宇宙人はシルエットになっている。



また、訓練のせいで、午前1時から2時にかけて規則正しくテレパシーをキヤッチすることが可能になった。メンジャーは、こうして、与えられたメッセージを地球上で実践すべく使命感に燃えていたのである。

1956年4月のある夜、仕事を終えたメンジャーは、例の強い送念を感じて家を出た。今回は、コネクタの証拠になる写真を撮る

考えた。現場で待っていると脈動しながら宇宙船が降りてきた。着陸寸前の様子を数枚撮ったあと、着陸した船体の前に立った宇宙人に向かってシャッターを切った。

握手を交わし、しゃべったが、男は、船体から放射能が放出されているのでよい写真は撮れないだろうとほめかした。実際、現像されてきた写真を見ると、船体の前に立つ宇宙人が完全にシルエットになっていた。

第2の撮影のチャンスがやってきたのは8月2日の正午過ぎだった。いつもの場所に出現した宇宙船が地上60センチくらいのところまできたときシャッターを押し、このときメンジャーは、船体底部の3つの着陸ギアの1つがゆがむように変形するのを見た。

### いよいよ金星へ

同じころ、メンジャーは、これまでコネクタした宇宙人の中でももっとも高位に属する、偉大な師ともいふべき人物と会った。

いつもの場所の上空に炎に包まれた物体が出現、それが次第にベール型の本体をみせ着地した。船体の入口が開き、周囲を圧倒せんばかりの威厳にあふれて、プロント

の髪を肩になびかせた容姿端麗な男が現れた。このときは、近くのリング圏に働く隣人たちもこの光景に居合わせ、かたずをのんで見守っていた。

男は深い愛と理解に満ちたまなざしでメンジャーをみつめた。彼はすぐにこの男が高位に属する宇宙人であることがわかった。なしら、言葉で表したら1週間も2週間もかかるほどの内容を、わずか5分間のテレパシーでメンジャーの頭脳に植え込むのだ。このメッセージは必要なときにいつでも活用できるように潜在意識として記録されたのである。

この偉大な師を乗せた宇宙船は再び炎の塊りになって上空に没していった。それはまるでフアチマの奇跡をみるような光景だった。

メンジャーが初めて宇宙船内に入ることを許され、金星偵察船に乗船して宇宙飛行をしてきたのもこの年、1956年のことだった。

船内に入ろうとしたとき、宇宙人は妙な器具を取り出して、メンジャーに向かいブルーの光線を浴びせた。船内の状態に身体を同調させるためだと言われた。入ってみると、奇妙なパネルや電子装置のようなものがあつた。あちこち見回ったあと、壁が輝き始め、急

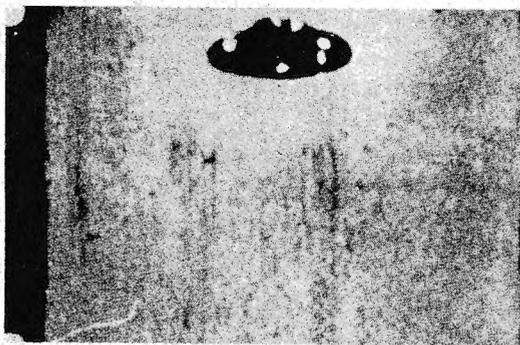
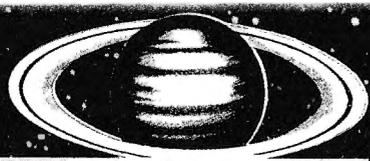
に身体が押し上げられるような感じがし、気がつくやうに、常時コネクタがなされる場所に着いていた。時計の針が入船の時刻を示したまま止まっていたが、船内の反重力の影響だと教えられた。

そのとき宇宙人が約束してくれた金星への飛行に同乗したのは、その1か月後のことだった。

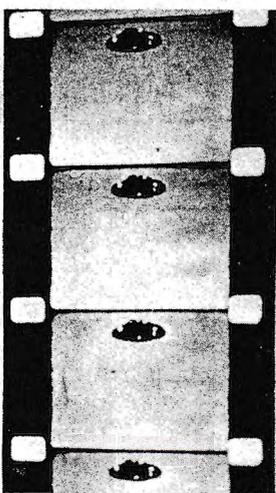
いつもの会見場所に行ってみると、これまでになく大型の宇宙船が着陸してきた。まず、船内の大きな部屋に案内された。この船には3人の宇宙人が乗っており、金星の偵察船であることを知った。

「これから大気圏を出ます」テールについて宇宙人が言った。スクリーンに美しい光景が映り出した。無数の星をバックに惑星が見え、月が後方に消えた。

いよいよ金星に近づいたところで、数フィートから数百フィートの高さからの金星の光景が音響つまで映し出された。ラセン状に伸びたドーム型の建物、その周囲にはレッドウッドに似た樹々が茂り、整然とした庭も見える。バステルカラーの衣服を身につけた人々が行き交うかたわらを、車輪のない乗り物がすべるように走っている。異様な動物も見える。やがてスクリーンがぼやけ視察は終了した。



メンジャーが撮影した宇宙船。  
右の2枚はテレビで放映されたもの。



### マールと出会い 自己の前世を知る

同じ年の秋、メンジャーは、新しく知り合ったジョージ・ヴァン・タッセルというコンタクトイとともに、ラジオの「ロング・ジョン・シヨール」テレビの「スチープ・



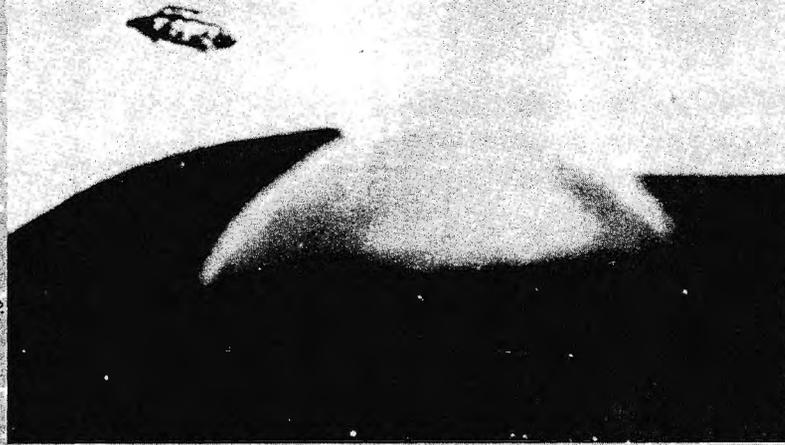
アレン・シヨール」に出演、自分の体験を発表した。これが大変な反響をよび、ハイブリッジのメンジャー宅には大ぜいの人々が押しかけてきた。大半の人たちは好奇心にかられてやってきたのだが、2人は好意的に迎え、その体験談と与えられた使命を説いてきかせた。そんなある日、メンジャー宅でシヨールが講演したとき、聴衆の中にひととき異彩を放つ1人の女性がいてメンジャーの眼をひきつけた。「似ている」彼女は、金星からきたあの女性にそっくりなのだ。プロンドの髪、スリムな肢体。この女性は名前をマールといった。その瞳は、知性で輝いていた。メンジャーは、この女性がやがて自分と活動をともにする運命にあると直感した。

だれもマールについてなにも知らなかった。彼女自身、宇宙人に会ったことも、円盤をみたこともないという。が、彼女は金星からきた女性とウリ二つだった。メンジャーは次第にマールを愛し始めていた。彼は、以前宇宙人から、人間は死ぬと再びいろいろな惑星上で生まれ変わると教えられていた。他の惑星の人間も同様で、この地球上でも数多くの人々が再生し、地球人の肉体をもって生活しているが、自分が転生したことに気づく人も気づかないままの人もいるという。

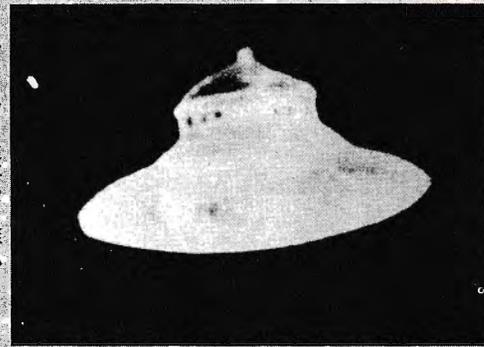
マールはきつと金星人にちがいない、とメンジャーは思った。そして、彼が24歳のとき、金星からきた女性と再会したときの会見模様がフラッシュバックした。あのとき彼女は再会を否定しなかったけれど、妙なことを言っていた。もし再び会えるとしても、それは自分の妹として再会するだろう。その女性はあなたの生涯の伴侶となるはずだ。彼女はすでにこのニューヨーク州のどこかに生まれている。ある日突然、あなたは彼女と出会うことになるだろうが、すぐに彼女が見分けられるはずだ。そして、自分とウリ二つなのを知って驚くはずだ、と。

いまになって彼女の言葉が理解できた。まちがいない、マールは金星人の生まれ変わりなのだ。メンジャーはマールをひと目みたとき魂の調和を感じていた。そして、マールに会ってから、メンジャーは自分の遠い過去の記憶を思い出すにいたった。驚くべきことに、メンジャーは、かつて土星人だったのである。土星人として、彼は若者たちに宇宙の神の法則を教えるために、自分の宇宙船を駆使し

月面のドーム近くに着陸中の宇宙船  
(上)と金星人が乗ってきた宇宙船(下)



ていろんな惑星を巡っていた。マールと金星で初めて会ったのもそんなときだった。2人はすぐに恋仲となったが、その直後、彼が急に地球へ行くことになり、2人は別れ別れにならなければならなかった。そのとき彼は、ハワード・メンジャーという名の、1歳の男の子の死に出くわした。彼は



小さな幼い遺体から離脱していく魂に結合し、再びその肉体に入りこんだ。こうして子供は奇跡的に息を吹き返したのであった。それが今日のハワード・メンジャーなのである。記憶をとり戻すのに、宇宙人の援助もあつたが、オリジナルの魂に当時の意識が残っていたためにかつての自己の存在を知ることができたのだという。

1957年、メンジャーは、父や息子など4人の身内をつぎつぎに失うという不幸にあつた。このショックから立ち直る意味でも、彼は、精神的に講演して回り、他の惑星に人類が存在していること、彼らが限りなき援助の手をさし

### メンジャー 月面に降りる

べていることを伝えた。メンジャーは全生涯を投げうって世間の嘲笑などを覚悟のうえで、ボランティア活動をつづける決意であつた。

1957年9月、友人からの電話でメンジャーはいつもの会見場所へでかけていった。今回はかつてないすごい体験をするような予感がした。宇宙船が1機、すでに待機していた。船のクルーは全部で6名、1人がコントローラー、もう1人がコンタクター、残りの4名はメンジャーを含めた地球人であつた。

「今回は地球時間で7、10日くらいの長旅になります。そのつもりでいてください」

スピーカーから声が流れた。そして、メンジャーら一行の身体は宇宙旅行に支障をきたさないよう、変換操作がなされた。

地球が急速に遠ざかっていくのがスクリーンに映つた。船内のライトが暗くなり、部屋中黄色い光が充滿したが、またすぐに元にもどつた。メンジャーは一瞬息苦しさを覚えたがすぐに楽になつた。その後、一行は寝袋に案内された。

部屋はそれぞれ区切られていて、そこは2段ベッドが置かれていた。ベッドは心地よく、興奮しているはずなのに、すぐに眠りについた。やがて軽いノックの音で目をさまし、時計を見ると4時間しかたつていなかったが、気分爽快であつた。舷窓から外を見ると、さまざまに輝く光の塊が見えた。中に1つ、赤い球体が見えた。巨大な惑星のようだった。あとで太陽だと教えられたが、なぜ輝いて見えないのか不思議だつた。

シャワーを浴びたのち、食卓についた。案内役の宇宙人は手際よく料理を作ってくれた。キャベツ、キャロット、ポテト、小麦、コーン、ナッツ、ネクターリンのような果実も出た。どれもこれもとても美味だつた。

やがてコントローラーから月面着陸を告げるアナウンスが流れた。「写真を撮るなら今のうちですよ！」宇宙人に言われ、メンジャーは舷窓から見える光景を撮影した。地表に接近するにつれ、直径5メートル、高さ15メートルはあろうかと思われる、半透明の材質で作られたドーム状の建造物が見えた。宇宙船は平坦な銅色の着陸路をすべるようにして、巨大なこの建物の中に入つていった。建物はパー



ル色の輝きにつつまれ、シンプルな美しさを見せていた。

一行は巨大なラウンジで一服したのち、車輪のない空中カーのよな乗り物に乗せられ、見物に出かけた。乗り物は立体交差路をすべるように走った。眼下にビルまたビルが見えたが、すぐに町並みははずれた。そして山や谷を越えていった。砂漠地帯はネバダのそれに似ていた。この直後、地面に激突したロケットの残骸が見えた。着陸に失敗したものらしい。人が収容されていたとおぼしいカプセルが4つ飛散していた。ガイド嬢の説明では1944年のことだという。悲惨な光景に、一行は思わず息をのんだ。

やがて乗り物は、別のドームに収容された。一行は月面上に出ることを許された。外は別段息苦しさはなく、空気は暖かかった。湿度もなかった。思い切り手足を伸ばしている、一陣のつむじ風が舞った。空を見上げると全体が黄色っぽく見えた。地平線が間近に迫って見え、歩いていくとすぐに向う側に落ちてしまうような錯覚にかられた。足元の砂は黄白色で粉状だった。

再び建物に戻り、しばらくしてからグループ分けされた。そして

### 土星の音楽を放送し 地球人にアピール

宇宙人の指導で、特殊な言語を話す訓練が行われた。科学者、地理学者、電子技術者、宇宙飛行士、ロケットのエキスパートなどがグループに混じっている。日本人、ロシア人、ドイツ人などいても、総人数は百名をくだらないだろう。皆、国も言葉もちがうのに、相互に信頼し、一体となつて、親愛に満ちた雰囲気包まれていた。

数日後、ツアアの最後をしめくくる意味で、盛大な晩さん会が催された。名残りは尽きなかったが、メンジャー一行は、有意義な月旅行を終え、地球へ帰還した。

宇宙人は、ときどき援助の一環として、メンジャーの自我に内在している創造力を目ざめさせた。彼は音楽的知識が皆無だったにもかかわらず、ピアノが弾けるようになり、土星人の指導で、外宇宙の音楽を演奏することになった。

ある日、田舎道を車で走行中、メンジャーは突然見えない力で森の中の古びた小屋の前に誘導されてしまった。車を降り小屋に近づいて耳をすますと、それまで聞いていたこともない、魂の底からゆさぶられるような感動的なリズムが聞

こえてきた。  
「お待ちしてましたよ、ハワードさん」

突然戸が開き、招き入れられた。中に3人の男がいた。2人は金星人で、この不思議なリズムを演奏していたのは土星人だと紹介された。床に、ピアノに似た物が置かれていた。鍵盤はふつうのピアノよりずっと細長く、数もたくさんあり、鍵盤上のキーには奇妙なマークが描かれていた。

「弾いてごらんさいよ」

土星人がメンジャーに「ピアノを弾くようながした。ピアノなど弾いたことがないメンジャーはちゅうちよしたが、「心配ありません、あなたはぜひ弾くことができますよ」と言われ、メンジャーは、土星人の演奏を一度聞いてからピアノの前に座ることにした。すると、不思議なことに、曲が頭の中に浮かび、指が自然にキーに触れ、完璧とはいえないが1曲弾き終わることができたのである。

土星人は、この曲を演奏して、地球の人々の精神涵養に努めてほしいとメンジャーに託した。この曲を聞くことにより、人々の心が宇宙的広がりを持ち、互いに兄弟として愛し合う調和した世界を築くことができるというのである。

その後、メンジャーは、ピアノに向かえば自然に指が動くようになり、この「土星の音楽」を何度か演奏することになった。この音楽は、国中の反響をよび、ついにテープ化・レコード化の運びとなつたほどである。録音は、ニューヨーク州のステイト・エンタープライズ社で行われ、アメリカ各地の5つの放送局で紹介されたのである。

1958年、メンジャーは2度目の結婚をした。相手はもちろんマールである。彼女は実によくメンジャーに協力し、活動面でも精神面でも彼の支えとなった。

この年、メンジャーはラジオ番組のロング・ジョン・シヨアのスターの1人となった。そして秋にはジャイアントロックで、世界初のコンタクトイ大会を開いた。

メンジャーの驚異の報告はここで終わる。20余年たった現在、宇宙科学の目ざましい働きのおかげでわれわれは、ここに述べられている事柄の多くについて、疑いを持っていることができる。しかし、当時の人々に与えた衝撃の大きさは否定しようがないし、地球外知的生命の存在に注目させた点で無視できないだろう。